

巻頭言

幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科の教科特性とスタートカリキュラム

生活科教育研究会役員 木村 吉彦

子どもにとって小学校への入学とは、遊び中心の生活から（教科）学習中心の生活へと生活スタイルが大きく変わることです。幼児期の子どもたちは遊びながら様々な資質・能力を身に付け、小学校以降には教科学習を中心として学び、やはり様々な資質・能力を身に付けます。遊びを通した学びと教科学習を通した学びの両方をつなぐのが生活科であり、新入児童の最初の段階における生活科を中核としたカリキュラムが、スタートカリキュラムです。本稿は、子どもの発達や学びの連続性を大切にする生活科の教科特性と、スタートカリキュラムの意義を明確化するものです。

1 幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科

ここでは、教育の「目的論」「方法論」「評価論」の3観点から、生活科の教科特性を明らかにします。

（1）教育目的の観点から

生活科の究極的な教科目標は「自立への基礎を養う」です。人間が社会的に独り立ちするための基礎的部分を育てるという子ども像と育てたい方向性が示されています。これは明らかに「方向目標」（幼児教育目標の中心）です。しかし、実際の授業では、独り立ちするための資質・能力を「到達目標（行動目標）」（小学校教育目標の中心）として設定して授業を展開して構いません。すなわち、「生活科の教育目標は到達目標を内に含んだ方向目標」なのです。

（2）教育方法の観点から

例えば、「秋をさがそう」という単元では、「秋を見つけさせたい」という教師のねらいが反映された公園という（物的）教育環境に子どもを連れて行き、子どもが自分から秋を見つけたくなるよう言葉がけをして授業をします。これは、まさに「間接教育」（幼児教育方法の中心）の考え方による教育方法です。一方、教室に戻ると、作文シート等に今日の活動や感想を書く時間を設けます。このとき教師は、「シートに作文書いてね」と直接指示をします。「生活科の教育方法の基本は間接教育ですが、適宜直接教育（小学校教育方法の中心）を取り入れた指導も行われます。」

（3）評価論の観点から

生活科では対象が小学校低学年ということもあり、他児との比較によるのではなく、まさにその子の「伸びを認めて褒めてあげる」こと（「個人内評価」＝幼児教育評価の中心）が基本です。しかし、小学校なので「指導要録」には

「評価規準」に基づく「ＡＢＣ評価」を書く必要があります。「生活科の評価は評価規準を前提とした個人内評価（絶対評価）」です。

以上のように、生活科は、幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科であり、幼小連携の鍵を握る教科です。この教科特性こそが、スタートカリキュラムの中核を担うのが生活科であることの必然性を意味しています。

２ スタートカリキュラムの意義

スタートカリキュラムとは、新入児童の入学直後約１ヶ月間において、子どもが幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのことです。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、子どもに「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらし、新入児童の小学校へのスムーズな「適応」を促すことが期待されます。これがスタートカリキュラムの第一の意義です。これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信がもてるきっかけになります。

一方、私は、スタートカリキュラムを短期・中期・長期という３つの観点からも意味付けています。短期＝小学校１年目のスタートライン、中期＝小学校６年間のスタートライン、そして長期の観点では、自分の人生を主体的に生き抜くためのスタートラインがスタートカリキュラムです。これが第二の意義です。

（上越教育大学大学院教授）